他者の不幸を悲しむ情動，喜ぶ情動
－面接調査から把握されたその実態－

山　本　良　子

問題

1．これまでの情動研究

我々は日常生活の中で，自らは全く知らない人でもその人に宝くじが当たるなどの良い出来事が起こったとき，その他者の幸福を喜んだり，また妬ましく思ったり，その時々の状況によって複雑に様々な情動を経験している。なぜ，このように他者に起こった出来事が自分自身に直接関係がない場合でも様々な情動を経験するのだろうか。

従来の情動研究では，研究対象として，個体自らの利害関心に関係する事象においてのみ人に経験される"当事者"の情動が取り上げられていることがほとんどである。情動の中心的理論である基本情動理論や認知的評価理論（Lazarusら，1984）でも然りである。基本情動理論とは，Izard（1991）やEkman（1992）ら多くの研究者により提唱されたもので，ある生物の生存に必要なために進化の過程を経て残ってきたと考えられている，怒り，喜び，恐れなどの最も基礎的な情動を人間が持っているという考えである。生物個体は，自らにふりかかった状況に適応するため，状況に最もふさわしい情動を生起させる必要があり，その生起した情動が基本情動ということになる。このことから，基本情動とは，個体に何らかの事象がふりかかること，つまり，個体がその事象に対して"当事者"となることが情動生起の暗黙裏の前提となっていると言える。また，認知的評価理論とは，元々，Lazarus（1968）がストレスの研究において，刺激を脅威とそうでないものに弁別する過程を認知的評価としたことから始まったものである。遭遇した事象が，その個体の潜在的な利害関心に関わるか否かなどについて評価し，その結果により，情動生起の有無や強度，種類が規定され，その後の行動を決定すると仮定する。認知的評価理論では，個体の利害や目的に絡まない事象は情動生起の対象とされず，つまり，この理論においても，"当事者"として事象に絡むということが情動生起の前提となっていると言える。さらに，近年の情動研究では，他者との関係性や他者の目に映る自己の姿などについての複雑な意識が絡む"自己意識的情動"が，多くの研究者の高い関心を集めているが（Lewis,1992; Tangney,1995など），この情動にしても，他者との関係の維持や向上などが，本人自らの長期的な利害に関係する点では同じであり，そこで問題にされるのは，結局のところ，"当事者"の情動であると言わざるを得ない。

このように，これまでの心理学における情動研究では，"当事者情動"とでもいうべき，自らの利害に深く関係する出来事に対して生起する情動だけが主たる研究対象として取り上げられてきた。しかし，我々が日常生活において経験する情動は当然こればかりではない。冒頭で挙げた例のように，我々は，自分の利害に直接絡まない，他者に生じた出来事についても，時に様々な情動を経験し得ると言えるだろう。しかし，こうした，いわば"非当事者"が経験する情動に関して

は，これまでの心理学の中であまり検討されていないというのが実情である。

2．"非当事者"の情動

上述したように，従来の情動研究の主たる対象は，個体自らの利害関心に直接絡む"当事者"の情動であった。換言すれば，これまでの情動研究は，"事象"と"事象の直接経験者"との二項関係の性質によって"事象の直接経験者"の情動の生起の有無およびその種類や性質が規定されるという側面に主たる関心を払ってきたといえる。しかし，筆者が本研究において問題にしようとする"非当事者"が経験する情動とは，"事象"と"事象の直接経験者"，そして"事象には直接関係しない第三者"という，三項関係の中で生じるものである。そうした意味で，このような，非当事者が経験する情動を"三項関係情動"と呼ぶことにした（Figure 1参照)。

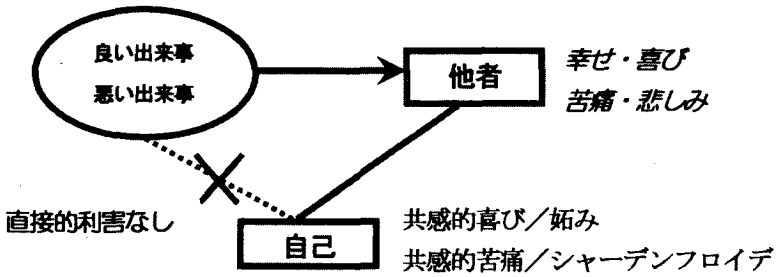

Figure 1　三項関係情動の発生メカニズム

三項関係情動に潜在的に深く関わり得る重要な理論枠として，"社会的比較理論"を挙げることが出来る。特に，きわめて示唆的な理論モデルに，Smith（2000）の研究がある。Smithは，社会的比較が下方か上方かということと，比較の結果，経験される情動が他者の心的状態に同化的か（他者の情動と同質か）あるいは対比的か（他者の情動と対極か）ということの組み合わせによって，"下方同化的情動（downward assimilative emotions)" "下方対比的情動（downward contrastive emotions)" "上方対比的情動（upward contrastive emotions)" "上方同化的情動（upward assimilative emotions)"という4タイプの情動が存在し得ることを仮定した。実のところ，この4タイプの情動はそれぞれ，三項関係情動の中の特に中核的な情動に対応していると考えられる。具体的に言えば，"下方同化的情動"に対応する情動は，他者にネガティブな事象が生じた際にその周りに位置する個体が覚える代理的な苦痛の経験である共感的苦痛（empathic distress)，"下方対比的情動"に対応するのは，他者が何らかの辛い状況にある場合の"いい気味"といった，ある種の喜びにも似た快感情，すなわちシャーデンフロイデ（schadenfreude)，また，"上方対比的情動"に対応する情動は，賞をもらう，昇進するなど，他者にポジティブな事象が生じた際に，それを見聞きした個人が覚える相対的にネガティブな情動，すなわち妬み（envy)，最後に，"上方同化的情動"に対応する情動は，他者が良い状況にある場合に，その他者の幸せを自分自身のことのように他者と共に喜ぶ"共感的喜び（empathic joy)"とでもいうべき情動ということになるだろう（Smith自身は"上方同化的情動"の代表的なものとして，"賞賛（admiration)"とともに，共感的喜びとよく似た"インスピレーション・感激（inspiration)"とい

う情動を挙げている)。Figure2には，他者に生じた事象の内容（良い事象か悪い事象か）の軸と，その時，それに接した個人に経験される情動の内容（他者が経験するであろう情動と同化的か対比的か）の軸を直交的に組み合わせる形で，上述した4つの代表的な三項関係情動を配置してある。

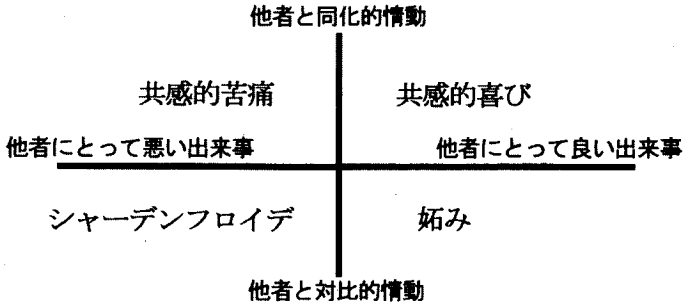

Figure 2　4種の三項関係情動

従来の情動研究では，共感的苦痛以外の三項関係情動についての研究は相対的に稀少である。妬みについては，嫉妬（jealousy; 関係性の喪失に関して生じるネガティブ情動）との関連において取り上げられてはきているが（Anderson,2002など），実証的な研究は僅かであり，また，"シャーデンフロイデ"や"共感的喜び"に相当する情動を実証的心理学研究の枠内に見出すことはほとんど出来ない。さらに，他者に正負いずれかの事象が生じたという同様の状況にありながら，ある時は共感的苦痛を，ある時はシャーデンフロイデを，またある時は共感的喜びを，ある時は妬みを覚えるということがあるわけだが，それはどのような要因によって分岐してくるのか，その全体的なメカニズムが既成の情動理論からは見えてこないのが現状である。こうした情動に関して理論的枠付けを設けることにより，今後の情動研究全般に新たな地平を拓き得ると考えられた。

3．本研究の目的

本来であれば，三項関係情動の全てを取り上げて論じるべきであるが，全ての情動を一度に取り上げ，総体的に分析することは膨大な研究計画となってしまうため，前研究では，研究の第一段階として，他者にポジティブ事象が生じた際に経験される"共感的喜び"と"妬み"を取り上げ，これらの情動の実態を把握した後に，両情動の発生に関与する状況要因を明らかにする研究を行った(詳細は山本（西隅），2005を参照)。本研究では，他者に悪い事象が生じるネガティブ状況に限定し，その状況下で"非当事者"に，理論上想定されている"共感的苦痛"と"シャーデンフロイデ"の両情動が実際に経験されているのかどうか，また，経験されている場合，どのように経験されているのか，その情動経験の詳細について把握することを主な目的とした。

共感的苦痛およびシャーデンフロイデについて実証的に示した先行研究がほとんどないことから，筆者は，これらの情動経験の実態を把握するため，日常生活の中で身近な他者に悪い事象が生じた際，その事象と直接利害関係のない"非当事者"に，"共感的苦痛"および"シャーデンフロイデ"の経験の有無を問うことから始めることにした。さらに，これら2つの情動生起の性質に関

する知見もほとんどなく，これらの情動が一体どのように人に経験されるのか，その具体的な性質について解明することが必要と考えられた。

筆者が先に行った共感的喜びと妬みの研究の中で明らかになった重要な性質として，情動の「同時生起性」と「同一他者生起性」がある。従来の情動研究で扱われてきた"当事者情動"では，ネガティブ状況においては怒りや悲しみなどのネガティブ情動のみが，反対にポジティブ状況においては，喜びや幸福感などのポジティブ情動のみが生起されるのが普通であった。しかし，共感的喜びおよび妬みは，互いに他者に同化的および対比的という相反する意味を持つ情動であるにも関わらず，同一場面において両方の情動が生起されることが分かった。また，当事者情動では，その経験に全く関与しない「他者」の存在が，三項関係情動の経験においては非常に重要となり，同じ一人の他者に対して，共感的喜びおよび妬みのどちらもの情動が経験されることが分かった。このように，当事者情動においては全く考慮せずにすんでいた，情動の「同時生起性」や「同一他者生起性」という性質が共感的喜びおよび妬みについて見られたことから，これらは三項関係情動全般において共通の重要な性質である可能性が予測されたため，共感的苦痛およびシャーデンフロイデについても，この2点の性質について明らかにする必要があると考えた。

また，4種存在する三項関係情動内の関係性も無視できない点である。過去に経験された三項関係情動の各情動が，後に経験される三項関係情動に関与や影響するという可能性の有無については，現在のところ全く明らかとなっていない。本研究では，あくまで，共感的苦痛およびシャーデンフロイデの発生について示すことが目的であるため，過去の共感的喜びおよび妬みの経験というものが，その後の共感的苦痛およびシャーデンフロイデの経験にいかに関与するのかという方向で，その関係性を示す必要があると考えた。過去のポジティブ状況において経験された情動のタイプ（同化的か対比的か）が，その後のネガティブ状況で経験される情動のタイプに関与するか否か，さらに，同化的（または対比的）な情動を経験する他者にはいつでも同化的（または対比的）な情動を経験するといった「情動の対称性」ともいえるパターンが存在するか否かについて明示することは，今後，4タイプの三項関係情動を総括的に捉えていく上で重要である。

上記の理由から，筆者は，両情動の生起場面における重要な性質として，以下の3つを取り上げ明らかにすることにした。一つ目として，共感的苦痛とシャーデンフロイデは，同じ1つの場面で，両方，同時に生起されるのか。二つ目として，これらの相反する情動は，同一対象に対して経験されるのか。三つ目として，過去に，他者の身に生じた幸福を共に喜んだ，もしくは妬んだという経験が，その後，同じ他者が不幸な状況に陥ったときに共感的苦痛およびシャーデンフロイデの経験に関与または影響するのか。共感的苦痛およびシャーデンフロイデに関して，生起にまつわる詳細がほとんど明らかになっておらず，これらの情動を扱う研究を行う上で，この3つが重要な知見となりうることから，本研究にて明らかにすることを目指した。

本研究では，共感的苦痛とシャーデンフロイデの情動経験の実態を把握するため，エピソードについて詳細を問うこと，また，上記に示した3つの具体的な疑問点を直接問い，明らかにすることが必要であったために，半構造化面接調査法を用いることとした。

方法

1．研究協力者

研究協力者は，関東圏の大学生および大学院生46名（男性24名，女性22名），平均年齢は20.1歳（SD:1.21，range:18-23）であった。

2．調査実施時期と手続き

2005年6～7月に，筆者が，大学の心理学の授業中に調査協力について依頼した。筆者と協力者との1対1の半構造化面接調査で，一人につき約40分行った。始めの約10分間に雑談をし，協力者の緊張が和らいだことを確認した後，調査に移った。了解を得て，面接中はMDレコーダーで全内容を録音した。調査前に氏名，年齢，所属，学年，きょうだい構成について記入させた。

3．質問内容

協力者の身近な他者に悪い事象が生じた際における，協力者の共感的苦痛やシャーデンフロイデの経験の有無，また，経験がある場合，そのエピソードの詳細について問うた。具体的な質問項目としては，

①②身近な他者への共感的苦痛（またはシャーデンフロイデ）の経験の有無と，出来るだけ最近で印象深いエピソードの詳細

③ある他者に悪い事象が生じるという同一場面で，共感的苦痛およびシャーデンフロイデの両情動が経験されるか否か

④ある同じ一人の他者に，共感的苦痛およびシャーデンフロイデの両情動が経験されるか否か

⑤⑥身近な他者に良い事象が生じた際における，共感的喜び（または妬み）の経験の有無

⑦⑧過去に共感的喜びを経験した同じ他者に，共感的苦痛（またはシャーデンフロイデ）が経験されることがあるかどうか

⑨⑩過去に妬みを経験した同じ他者に，シャーデンフロイデ（または共感的苦痛）が経験されることがあるかどうか

面接では，"共感的苦痛""シャーデンフロイデ""共感的喜び"という表現は協力者にとって耳慣れないものであると予測されたので，代わりに"他者の不幸を共に悲しむ気持ち""他者の不幸を喜ぶ気持ち""他者の幸福を共に喜ぶ気持ち"という表現を用いた。また，共感的苦痛およびシャーデンフロイデが経験された他者について，どのような立場にある他者か（友人，後輩など），また，どの程度仲の良い他者か（とても仲が良いなど）という関係性についても尋ねた。

結果

調査で得られた各質問項目に対する回答を，度数としてまとめ，χ^2検定を行った。

1．共感的苦痛およびシャーデンフロイデの経験の有無

協力者が身近な他者に悪い事象が生じた際に，共感的苦痛およびシャーデンフロイデを経験したことがあるかどうかについて，共感的苦痛とシャーデンフロイデの両情動とも「経験がある」という回答が有意に多かった（共感的苦痛 ある45，なし1，シャーデンフロイデ ある41，なし5，いずれも$p<.01$）。これより，日常生活で多くの人に，他者に悪い事象が生じた際，共感的苦

痛と，シャーデンフロイデのいずれの情動も実際に経験されていることが確認された。

両情動が経験された際のエピソードについて，まず，両方の情動とも，経験された他者として，「友人」が最も多く挙げられた（Table 1 参照)。また，両情動とも他者の性別は，協力者と「同性」が多かった(共感的苦痛　同性36，異性 9，経験しない 1，シャーデンフロイデ　同性31，異性 7，経験しない 5，思い浮かばない 3)。さらに，両情動が経験された他者を，仲の良さで分けた場合，共感的苦痛は「仲の良い他者」に対して最も多く経験されていたが，シャーデンフロイデは「仲が悪い他者」と「仲が良い他者」の両方に対して多く経験されていた(Figure 3 参照)。

Table 1　共感的苦痛およびシャーデンフロイデが経験された他者

共感的苦痛		シャーデンフロイデ	
友人	34	友人	33
母親	3	ライバル	2
いとこ	2	その他	3
後輩	2	思い浮かばない	3
その他	4	経験しない	5
経験しない	1		
	46		46

共感的苦痛およびシャーデンフロイデが経験された他者に生じた事象については，共感的苦痛が「失恋・恋の悩み」に対して多く経験されていたのに対し，シャーデンフロイデは他者の「試験などでの不合格」や「単位を落とす」という出来事に対して多く経験されていた(Table 2 参照)。

面接で語られた具体的なエピソードの典型例としては，

共感的苦痛の経験ありの場合

- 親友が大学受験に落ちたときの話
- 仲の良い友人が手術をしたときの話
- 普通程度に仲の良い友人が，単位を落としそうになったときの話

シャーデンフロイデの経験ありの場合

- 仲の悪い友人が，資格試験に落ちたときの話
- 仲の良い友人が受験に落ちて2浪したときの話
- 苦手な人が，なにかに失敗していたときの話

などがあった。こういったエピソード，特にシャーデンフロイデに関するエピソードを語る際には，「友人は受験を甘く見ていて，あまり真剣に勉強していなかったから，不合格でも自業自得という気持ちだった」「それまでも，お互いにいい気味と思い合っていた関係だったので，私もいい気味という気持ちになった」などという回答が得られ，調査者が尋ねなくても，なぜ自分がそのような情動を経験したかについての理由や根拠を自分なりに分析し説明する者が多くいた。

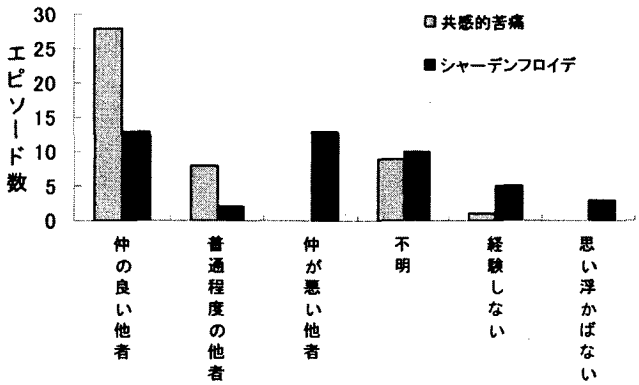

Figure 3　共感的苦痛およびシャーデンフロイデが経験された対象との仲の良さ

Table 2　共感的苦痛およびシャーデンフロイデが経験された事象

共感的苦痛		シャーデンフロイデ	
失恋・恋の悩み	13	受験や試験での不合格	9
身内・親しい人の死	6	単位を落とす・落としかける	7
病気・怪我	5	成績不振	4
単位を落とす・落としかける	4	先生などからの叱責	4
受験や試験での不合格	4	何かへの失敗	3
友人関係や部活の悩み	3	失恋	2
何かへの失敗	2	恋人とのけんか	2
ものの紛失	2	その他	7
その他	6	経験しない	5
経験しない	1	思い浮かばない	3
	46		46

2．同一場面における情動の経験

ある身近な他者に悪い事象が生じるという一つの場面において，共感的苦痛とシャーデンフロイデの両情動が経験されるかどうかについては，同一場面において両情動が経験されることが「ある」と回答した者が「ない」者よりも有意に多かった（ある32，なし6，$p<.01$）。これより，ある他者に悪い事象が生じるという同じ一つの場面において，共感的苦痛とシャーデンフロイデの両情動が同時に経験されていることが分かった。

3．同一対象に対する情動の経験

同じ一人の他者に対して，共感的苦痛とシャーデンフロイデの相反する情動を経験することがあるかどうかについては，過去にシャーデンフロイデを経験したことある他者に対して，共感的

苦痛を経験することが「ある」者は「ない」者より有意に多く（ある36，なし5，無効回答5，p<.01），過去に共感的苦痛を経験したことのある他者に対して，シャーデンフロイデを経験することが「ある」者は「ない」者より有意に少なかった（ある12，ない29，無効回答5，p<.01）。この結果より，共感的苦痛およびシャーデンフロイデの両情動は，同じ他者に対してどちらも経験されうることが明らかとなり，さらに，過去にシャーデンフロイデを経験した他者に対して共感的苦痛は経験されやすいが，過去に共感的苦痛を経験した他者に対してシャーデンフロイデは経験されにくいことが分かった。

4．共感的喜びと妬みの経験との関連

他者に悪い事象が生じた際に経験される共感的苦痛およびシャーデンフロイデという情動が，他者に良い事象が生じた際に経験される共感的喜びおよび妬みという情動と何らかの関連を持ちうるかどうかについて調べた。まず，身近な他者に良い事象が生じた際に共感的喜びおよび妬みの経験があるかどうかについて尋ねたところ，両情動とも経験したことが「ある」と回答した者が，「ない」と回答した者よりも有意に多かった（共感的喜び　ある45，なし1，妬み　ある40，なし6，いずれもp<.01）。これより，日常生活で，多くの人に，他者に良い出来事が生じた際，共感的喜びおよび妬みのどちらの情動も経験されていることが確かめられた。

続いて，共感的苦痛とシャーデンフロイデの経験に，過去に経験された共感的喜びと妬みの情動が関連するかどうかについて明らかにするため，方法のところで示した⑦から⑩の4通りの質問について尋ねた。その結果，Figure 4のように，過去に共感的喜びを経験した他者に対しては，共感的苦痛を経験することは有意に多いが（ある44，なし1，無効回答1，p<.01），シャーデンフロイデを経験することはほとんどない（ある16，なし29，無効回答1，n.s. p=.053）のに対し，過去に妬みを経験した他者に対しては，シャーデンフロイデも有意に多く経験される（ある31，なし9，無効回答6，p<.01）が，共感的苦痛も経験されることが有意に多いことが分かった（ある28，なし12，無効回答6，p<.05）。

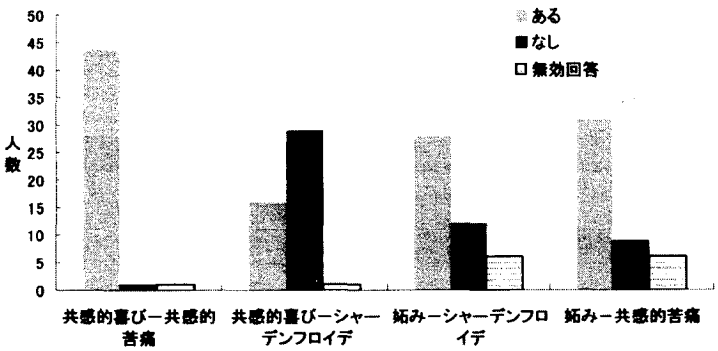

Figure 4　他者の幸福についての過去の情動経験と共感的苦痛およびシャーデンフロイデとの関連*

これらの結果より，過去に共感的喜びを経験した他者に対して共感的苦痛が経験されやすいこと，また，過去に妬みを経験した他者に対してシャーデンフロイデが経験されやすいことが分かった。さらに，過去に共感的喜びを経験した他者に対して，シャーデンフロイデは経験されにくいが，過去に妬みを経験した他者に対しては共感的苦痛が経験されやすいことが分かった。

考察

結果より，まず，共感的苦痛およびシャーデンフロイデという情動が理論上に想定されるだけでなく，実際に日常場面において経験されていることが確かめられた。両情動が経験された他者に「同性」の「友人」が多く挙げられたのは，研究協力者が学生であり，彼らの生活に同性の友人が密接に関連するためと考えられる。共感的苦痛は，仲の良い他者に多く経験されていたが，シャーデンフロイデが，仲の悪い他者に加え，仲の良い他者に対しても経験されていたことから，シャーデンフロイデが共感的苦痛に比べて，他者との仲の良さの程度に影響を受けずに経験される情動であることが示唆された。仲の良いはずの他者に対してまで，他者の経験している情動と対比的なシャーデンフロイデが経験されるのはなぜか。これについては，仲の良さ以外の他の要因がシャーデンフロイデの発生に関与することが推測される。Smithら（1996）は，シャーデンフロイデの生起を導くものとして劣等感（inferiority）を提案し，また，Leachら（2003）も，シャーデンフロイデが，劣等感の恐怖への"imaginary revenge（想像上の復讐）"としての役割を果たしうるとしている。これらの研究者の言うように，シャーデンフロイデという情動が劣等感と関係すると考えるとき，学生の協力者にとって，同性の友人を主とする身近な他者が，勉強や部活，恋愛など生活上の様々な点においてライバルもしくは比較相手になっていることは容易に想像でき（実際，シャーデンフロイデが経験された他者として，友人の次に多く挙げられたのは「ライバル」であった），その関係の中で劣等感を多かれ少なかれ感じているために，仲の良さに関わらずシャーデンフロイデが経験されるのは自然なことと考えられた。しかし，今回の結果は，たまたま挙げられたエピソードの中に現れた他者について分類したものであり，他者との仲の良さの程度が両情動の経験に直接関与するかどうか，さらに，"仲が良い他者だから共感的苦痛を経験する"といった因果関係があるかどうかについては明言できない。この点については，今後，厳密に調査する必要があるだろう。

また，共感的苦痛やシャーデンフロイデが経験された出来事として，他者の「失恋・恋愛の悩み」や「試験への不合格」，「単位を落とす」「成績不振」などが挙げられたが，これらはいずれも学生協力者の生活に根付いた日常的出来事であった。また，共感的苦痛だけにおいては，「身内・親しい人の死」や「病気・怪我」という出来事も挙げられており，これらの出来事は，特に「母親」や「いとこ」の友人以外の他者に対して多く経験されているものと考えられた。シャーデンフロイデが，他者の肉親の死や事故，病気といった深刻な不幸に対して経験された者は稀であったことから，この情動は，他者の深刻な不幸な出来事に対して生じるのではなく，それほど深刻でない，日常の中で普通に起こりうる，ちょっとした不幸な出来事に限定して経験される情動であることが分かった。

共感的苦痛およびシャーデンフロイデ生起の際の性質についても明らかとなった。まず，他者

に悪い事象が生じるという状況において，多くの場合，人に，共感的苦痛またはシャーデンフロイデのいずれか一方の情動のみではなく，２つの情動が共に経験されていることが分かった。なぜ，１つの場面において，相反する情動が同時に経験されるのだろうか。その理由の１つとして，１つの場面を他者と自分自身の両方の視点から見ていることが挙げられる。他者に悪い事象が生じた際，他者視点に立った場合，それは不幸な状況以外の何ものでもなく，自然と他者が感じている辛い気持ちに同化的な情動が経験されることになる。しかし，反対に，自分視点に立った場合，他者の不幸な現在の状況だけでなく，他者がその不幸な状況に至るまでの経緯や原因などについて冷静な状況判断が可能となり，その結果，例えば，"あれだけ授業をさぼっていたのだから，単位を落としていい気味だ"などという風に，総合的かつ客観的な状況判断を行うことで，他者が経験している情動と対比的な情動が生起することが考えられる。Hoffman（2000）は，共感が喚起されるプロセスは人の発達が進むにつれて増え，児童期後期には，他者の立場に立って他者の状況をより正確に想像する"役割取得"が可能となるとしている。また，Davis（1999）は，共感性の個人差を測定する尺度を開発したが，その尺度に含まれる４つの次元のうち１つに，他者の立場に立って気持ちを想像する"視点取得"を設定している。HoffmanとDavisが意味するところの"共感"は本研究においての"共感的苦痛"と一致することから，共感的苦痛は他者視点に立つことで経験される情動であり，シャーデンフロイデは自己視点に立つことで経験される情動と言えよう。実際，調査の中でも，同一他者に２つの情動が経験される理由として，この視点取得について言及する協力者も数人いた。これらのことから，１つの場面において複数の視点を獲得することが，相反する２つの情動が複雑に生起する理由であると考えられた。

次に，共感的苦痛を経験する他者，シャーデンフロイデを経験する他者というように，それぞれの他者に特定の情動が経験されるのではなく，同じ他者に対して，相反する２つの情動のどちらともが経験されることが明らかとなった。つまり，過去に，共感的苦痛を経験したことのある他者に対しても，場面が異なれば，シャーデンフロイデが経験されることもあり，また反対も同様である。他者によって経験される情動が特定されていないのは，他者そのものや他者との親しさまたは仲の良さといった関係性などだけで経験される情動が決定されているのではなく，例えば，他者に事象が生じるまでの経緯や事象が生じた原因，さらに，その事象以前に，他者が自分に対してどのような態度をとってきたのかという過去の態度といった，その他様々な状況的な要因によってもまた，経験される情動が影響されるためと考えられた。実際，三項関係情動のうち，他者に良い事象が生じた際に経験される共感的喜びおよび妬みについては，それらの経験に，他者に生じた事象の自己にとっての潜在的価値や，事象が生じる以前の自己と他者の幸福状態のバランスなどの状況要因が関与しており（山本（西隅),2005)，共感的苦痛およびシャーデンフロイデについても同様に，これらの要因が関与していることが推測された。この点についても，今後，実証的に取り上げ明らかにする必要がある。

さらに，過去に経験された共感的喜びと妬みとの関連についても明らかとなった。過去に共感的喜びまたは妬みを経験した他者のどちらの他者に対しても，その他者に悪い事象が生じた際には共感的苦痛が経験されるという結果より，他者が経験している情動と同化的な情動が経験され

る他者には，他者に悪い事象または良い事象が起こってもいつでも他者と同化的な情動を，また，他者が経験している情動と対比的な情動が経験される他者には，いつでも他者と対比的な情動が経験されるというような，「情動の対称性」が成立しないということが明かとなった。

過去に，他者の幸福を共に喜んだ人に対しては，その他者に不幸が生じた際，その不幸を喜ぶよりも共に悲しむ傾向が強く，また，過去に，他者の幸福を妬んだ人に対しても，不幸が生じた際には，その不幸を喜ぶよりも共に悲しむ傾向が強いという結果が得られたが，これは，もともと共感的苦痛という情動が人に生起されやすい情動であるためではないか。共感的苦痛は，当然，シャーデンフロイデとは違って，他者の苦しみを共に苦しむという正の情動であり，社会的にも受け入れられやすい情動であるといえる。さらに，親や学校など発達初期からの被養育・被教育経験を通して，他者の不幸を喜ぶことは教わらなくても，他者の不幸を共に嘆くことについては長期にわたってしつけられる背景がある。それに比して，シャーデンフロイデは，非常に経験されにくい情動と言えるだろう。他者の不幸を喜ぶ情動というのは，社会的に受け入れられにくい負の情動であり，その上，経験した場合，その情動自体，決して気持ちの良いものではない。場合によってはその情動を経験している自分自身に対して強い自己嫌悪を引き起こしたり，また，そのような情動を表出した場合，周囲の他者から叱責を受けたり非難される可能性まである，非常にリスクの高い情動と言える。したがって，シャーデンフロイデは，共感的苦痛の経験時には存在しない，それらのリスクを回避するために，ある一定の条件を満たさなければ，生起されないのではないだろうか。つまり，その条件とは，シャーデンフロイデを経験しても，自己嫌悪する必要がなく，また，誰から見ても"いい気味"と思われても仕方ないだけの理由が他者にあるということである。

本研究では，これまでほとんど明らかにされてこなかった共感的苦痛およびシャーデンフロイデの情動について，その経験の実態と，それらの情動生起時の性質について明らかにすることが出来た。調査においては細心の注意を払ったが，社会的望ましさによる回答への影響も充分加味しながら，結果を考察する必要があるだろう。さらに，今回の調査では，「身近な他者」に2つの情動が経験されたときの，「出来るだけ最近で印象深いエピソード」を一つあげてもらうという形式をとっており，得られた結果はそういった条件下に現れたものであることを忘れずに考察しなければいけない。また、調査内の各質問項目が完全に独立したものでないことも、結果を扱う上で、心に留めておかなければならない点である。本研究より，他者の性別や仲の良さと同時に，それら以外の個人内の要因および状況的な要因が２つの情動経験に密接に関連していることが示唆された。今後は，共感的苦痛およびシャーデンフロイデの情動生起に関与する要因を具体的に探る研究を行うことと共に，４種の三項関係情動の発生メカニズムを統合的に明らかにするような研究が必要となるだろう。

注釈

*横軸に示された４つの項目は，過去の他者の幸福状態に対する情動経験と，現在の他者の不幸状態に対する情動経験を示す。例えば，「共感的喜び－共感的苦痛」は，過去に共感的喜びを経験した他者に，共感的苦痛を生じることを示す。

引用文献

Anderson, R. E. (2002). Envy and jealousy. *American Journal of Psychotherapy,* Vol.56, No.4.455-479.

Davis, M. H. (1994). Empathy: *A social psychological approach.* Boulder: Westview Press. (デイビス, M. H. 菊池章夫(監訳)(1999). 共感の社会心理学 川島書店)

Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotions,* **6**, 169-200.

Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for Caring and Justice.* Cambridge University Press. (ホフマン, M. L. 菊池章夫・二宮克美(監訳)(2001). 共感と道徳性の発達心理学　川島書店)

Izard, C. E. (1991). *The psychology of emotions,* New York: Plenum Press.

Lazarus, R. S. (1968). *Emotions and adaptation: Conceptual and empirical relations. Nebraska symposium on motivation.* Lincoln: University of Nebraska Press.

Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping.* New York: Springer. (ラザルス, R. S. & フォークマン, S. 本明寛・春木豊・織田正美(監訳)(1991). ストレスの心理学　実務教育出版)

Leach, C. W., Spears, R., Bransconbe, N. R., & Doosje, B.(2003). Malicious Pleasure: Schadenfreude at the Suffering of Another Group. *Journal of Personality and Social Psychology,* **84**,932-943.

Lewis, M. (1992). Shame: *The exposed self.* New York: Free Press. (ルイス.M. 高橋惠子(監訳)(1997). 恥の心理学　ミネルヴァ書房)

Smith, R. H., Tuner, T. J., Garonzik, R., Leach, C. W., Urch, V., & Weston, C. (1996). Envy and schadenfreude. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **22**, 158-168.

Smith, R. H. (2000). Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research,* 173-200. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.

Tangney, J. P. (1995). *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride.* New York: Guilford.

山本(西隅)良子 (2005). "三項関係情動"の生起メカニズムを探る―共感的喜び・妬みの状況要因について―. 京都大学大学院教育学紀要, **50**, 371-385.

(教育方法学講座　博士後期課程3回生)

(受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日)

Empathic distress and the pleasure of other's unhappiness: The actual states of those emotions which were found by interviews with university students

YAMAMOTO Ryoko

Recently, a lot of special attention has been paid to the emotions that people experience when they aren't directly related to some events in terms of their own interests. In our daily lives, we often experience some emotions as observers when some events happen to others and not to ourselves. How might you feel if you hear about your friends', your parents' or your rivals' good news? You might be delighted with it, or you might be envious of it. In this study, I focused on "triangle emotions" (the emotions experienced in the triangle of self, other, and event i.e. the emotions people feel when something happens to others, specifically the emotions felt by people when others experience a bad event). I asked 46 university students (average age=20.1, males=24, females=22) whether they've ever experienced the triangle emotions (empathic joy and the pleasure of other's unhappiness) when some bad event happened to someone they know, and if so, the details of their emotions through indirect relation to the event. I found that most students in fact experienced such triangle emotions towards their friends, and so on, in their daily lives.